

オリパラ教育を体育科学習にどう位置付けるか

山口大学教育学部附属山口小学校 紀村修一

東京オリンピック・パラリンピックを盛り上げるために、学校現場ではどのような取組ができるでしょうか。1つの方法として、オリパラ教育と体育科学習を関連付けることが考えられます。以下は、パラリンピック種目「ボッチャ」を教材とした授業実践です。

本単元は、体力向上をめざして、体の動きを高める運動に取り組む学習です。ここでは、子どもが用具操作に難しさを感じやすいことから、巧みな動き（調整力）の高まりをめざしてパラリンピック種目「ボッチャ」を扱いました。そして、それを異校種の仲間と取り組む時間を意図的に設定しました。そうすることで、ボール運動の学習において、自己の力を制御しながらボールを操作したり、オリンピック・パラリンピックがめざすスポーツの意義や価値（共生の視点）に触れたりすることにつながると考えたからです。

本稿では、子どもたちが調整力の重要性に気付いた第2時と、共生の視点を意識して運動に取り組んだ第3・4時を中心に、子どもの学びの姿を紹介します。

1. 単元名 「いいね、仲間って（体の動きを高める運動）」（第5学年）

2. 授業の実践 [全5時間]

調整力を意識すると運動が得意になりそうだ [第2時の学び]

ここでは、2つの運動に取り組む時間を設定しました。まずは、「ダッシュ&キャッチゲーム」¹です。どの子どもも、力一杯ボールを投げるので、なかなかキャッチすることができません。次に、できる限り弱く投げると、今度は満足いく記録になりません。そこで、「自分の走力と相談して、ボールの投げ方を工夫してごらん」と声を掛けると、子どもたちは、ボールを投げる方向や強さを変化させながら繰り返し運動に取り組むようになりました。そして、仲間のよい動きを自分の動きに取り入れたり、記録の伸びを実感したりする中で、子どもたちは調整力の重要性に気付いたのです。その後「ボッチャ」に取り組み、調整力を意識しながら運動したり、パラリンピックへの興味関心を高めたりしました。



上方に投げたらすぐにダッシュして、ボールの落下地点に向かう。

ダッシュ&キャッチゲーム

ワンバウンドしたボールの下に入り込み、確実にキャッチする。

¹ スタートラインからボールを投げ、ボールの落下点に向かって走り、ワンバウンドしたボールをキャッチするゲーム。スタートラインからボールをキャッチした位置までの距離が長い方がよい記録。

異校種の仲間と一緒に運動するのは楽しいな [第3・4時の学び]

第3時では、幼稚園児や中学生と一緒に「ボッチャ」に取り組む時間を設定しました。まず、運動の得手不得手や年齢、性別等に関係なく取り組むことができる手軽な運動（ワクワクタイム）を演示し、子どもたちにやってみるように促しました。子どもたちは、互いに励まし合い、称賛し合いながら運動を楽しむことができました。その後、小学生がリーダーとなって「ボッチャ」に取り組みました。小学生は積極的に幼稚園児に対して、玉の投げ方や狙う場所をアドバイスしました。しかし、幼稚園児にはその意図がうまく伝わらず、小学生は困った様子でした。そこで、できるだけ具体的にアドバイスするように促すと、アドバイスの仕方を工夫する子どもの姿が見られました。以下は、そのときの様子です。



ワクワクタイム

K児（小学生）	もっと近くを狙って投げてみて。
A児（幼稚園児）	どこ？分からん。
K児（小学生）	ちょっと待ってよ。（移動）ここ。ここよ。狙ってみて。
M児（中学生）	うん。そこね。こうやって（上方に投げる動作をして）ゆっくりね。
A児（幼稚園児）	分かった。（結果的に狙った場所には投げる事ができず）
K児（小学生）	おいしいおいしい。さっきよりいい感じ。
M児（中学生）	ナイス。

上のK児とM児は、幼稚園児の発達の段階を踏まえ、狙う場所を具体的に伝えたり、投げ方を動作化したりしました。またA児も、素直にアドバイスを受け入れ、試していました。このようにして、「どうしたらみんなで楽しむことができるか」という問いを追究していったのです。

第4時では、幼稚園児も小学生も中学生も活躍できる作戦をチームで考え、進んで実践する子どもたちの姿が見られました。中には、「かべ作戦」²といった調整力と共生の視点のどちらも大切にしたい作戦を考えるチームも現れ、子どもたちは、夢中になって仲間と運動を楽しみながら、スポーツの意義や価値に触れることができました。



具体的にアドバイスするK児



アドバイスを意識するA児

3. 実践を振り返って

本実践では、子どもが、仲間と共に調整力を高めたり、異校種の仲間と運動に取り組むことの楽しさを味わったりする姿が見られました。特に、異校種の仲間と共に学習したことで、多様な他者の存在に気付いた子どもが多くいました。パラリンピック種目を身近に感じ、家族や友達と一緒に熱く応援する子どもたちの姿が今からとても楽しみです。

kimura.shuichi.xj@alumni.tsukuba.ac.jp（紀村修一）

² 調整力の高い小・中学生が先に球を投げて壁を作り、幼稚園児が強く投げたとしても玉が壁に当たって遠くに転がるのを防ぐ作戦。